

鈴鹿

若松

周辺

歩いてみよう

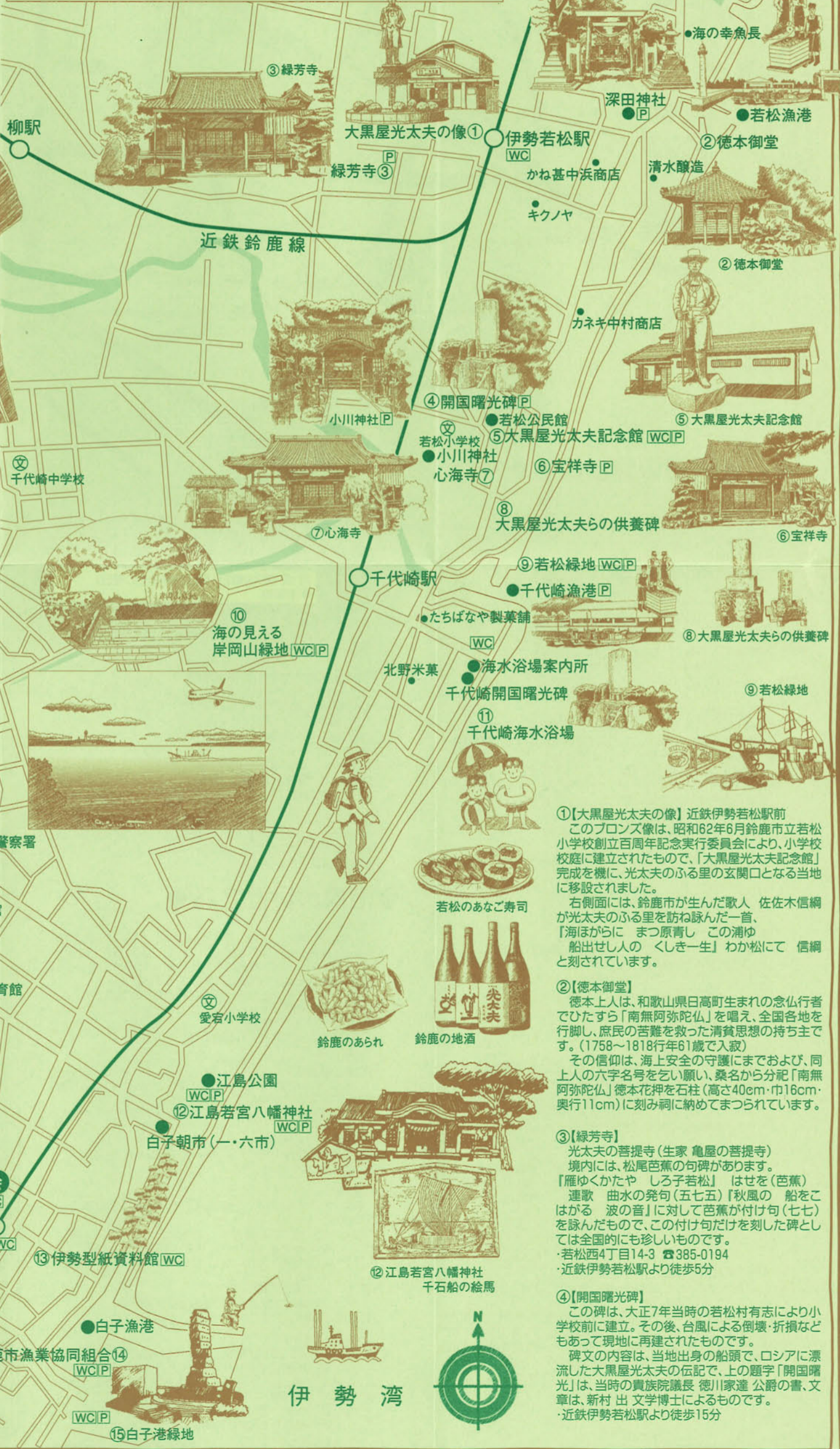


発行：鈴鹿市観光協会
協力：大黒屋光太夫顕彰会

大黒屋光太夫歴史の町「若松」の由来

天平12年(740)聖武天皇伊勢行幸の際の御製
「妹に恋い 若の松原 見渡せば 潮干の瀧の 田鶴鳴き渡る」(万葉集)や、
「雪降れば 若の松原 うすもれて 潮干の田鶴の 声ぞ寒けき」(新古今集)など、
往古の昔から、若の松原は歌枕として数多く使われ、いつしか若松の名が定着したと伝えられています。

【光太夫漂流巡路図】——往路 ——帰路



【大黒屋光太夫】
宝暦元年(1751)亀山藩領南若松村(現鈴鹿市)亀屋に生まれ、後に大黒屋を継ぎました。
天明2年12月、紀州藩の廻米や木綿などを積んだ神昌丸(乗組員17名)で、白子から江戸へ向かう途中、暴風雨のため遠くアムチカ島(アリューシャン列島)に流されました。飢餓と酷寒で仲間を失いながら、一行はシベリアの中心地イルクーツクに到着。その後、帰国を希望する光太夫は、ロシア人の助けを受けロシアの都ペテルブルグに上り、エカテリーナII世に拝謁し、帰国を許されました。
日本との交易を国策とするロシアは、使節とともに光太夫らを送還することを決定し、光太夫は、寛政4年(1792)根室に帰国しました。10年ぶりに帰国できたのは光太夫・磯吉・小市(根室で死亡)の3人だけでした。
翌年、11代将軍 家斉の面前で行われた光太夫・磯吉の報告は、その体験・見聞とも誠に貴重で、「北槎聞略」という名の書物にまとめられ、国の重要文化財に指定されています。また、光太夫のロシア語の知識も洋学者らに高く評価されました。
ロシアを紹介し、国際文化交流の先覚者となった光太夫は、文政11年(1828)78歳で没し、江戸本郷の興安寺に葬られました。

- 【大黒屋光太夫の像】 近鉄伊勢若松駅前
このブロンズ像は、昭和62年6月鈴鹿市立若松小学校創立百周年記念実行委員会により、小学校校庭に建立されたもので、「大黒屋光太夫記念館」完成を機に、光太夫のふるりの玄関口となる当地に移設されました。
右側面には、鈴鹿市が生んだ歌人、佐佐木信綱が光太夫のふるりを訪ね詠んだ一首、「海ほからに まつ原青し この浦ゆ 船出せし人の くしき一生」わか松にて 信綱と刻されています。
- 【徳本御堂】
徳本上人は、和歌山県日高町生まれの念仏行者でひたすら「南無阿彌陀仏」を唱え、全国各地を行脚し、庶民の苦難を救った清貧思想の持ち主です。(1758~1818行年61歳で入寂)
その信仰は、海上安全の守護にまでおよび、同上人の六字名号を乞い願ひ、桑名から分祀「南無阿彌陀仏」徳本花押を石柱(高さ40cm・巾16cm・奥行11cm)に刻み祠に納めてまつられています。
- 【緑芳寺】
光太夫の菩提寺(生家 亀屋の菩提寺)境内には、松尾芭蕉の句碑があります。「雁ゆかたや しろ子若松」はせを(芭蕉)連歌 曲水の発句(五七五)「秋風の 船をこはがる 波の音」に対して芭蕉が付け句(七七)を詠んだもので、この付け句だけを刻した碑としては全国的にも珍しいものです。
・若松西4丁目14-3 ☎385-0194
・近鉄伊勢若松駅より徒歩5分
- 【開国曙光碑】
この碑は、大正7年当時の若松村有志により小学校前に建立。その後、台風による倒壊・折損などもあって現地に再建されたものです。
碑文の内容は、当地出身の船頭で、ロシアに漂流した大黒屋光太夫の伝記で、上の題字「開国曙光」は、当時の貴族院議長 徳川家達 公爵の書、文章は、新村 出 文学博士によるものです。
・近鉄伊勢若松駅より徒歩15分



鈴鹿市観光協会
白子駅 WC
白子小学校
鈴鹿市漁業協同組合 WCIP
白子漁港
白子港緑地 WCIP



